

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作 :ウッチャン大好きっ子

＊<>で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

☆新キャラ

1. 内村 輝良 (てるよし)<運難コンビ 警視監>
2. 南原 清鷹 (きよたか)<運難コンビ・警視監で一応リーダーである。>

☆解説

1. 警視監・・・警察の階級で上から2番目の階級です。
踊る～』では吉田副総監が同じ位です。
亡つ下の階級の警視正は 踊る～』では室井さんや署長がこの階級です。)

～第20章～<親子喧嘩>

凱歌の失声症が治った事による騒ぎが治まり始めた所で龍牙は皆の前に立ち、静めた。
悪いがお祝いムードはこの辺までにして、これから決めなきゃいけない事が沢山あるから座ってくれ。」と龍牙は言い、座らせた。

全員、静かに席に着き、龍牙に注目した。

ちょっと待った！俺が進めるのか！？」と仲間達に目を向けたが、全員が”そうだ！”と言わんばかりの眼差しを向け返した。

龍牙は、”トキ”とし、『吐方がない』というノリで髪を掻き、話し始めた。

「はぁ～。ではまず始めに。きなこさんはどうしたいですか？つまり、凱歌と一緒に1211と戦いたいのか」と言う事です。」

と龍牙はきなこを見つめ、聞いた。

きなこは龍牙が言い終える前に、はっきりとした声で答えた。

「もちろん！私はホイさんと一緒に戦います！もう別れるのは嫌です！」

龍牙は『ここまではっきり言うとは・・・』と内心驚いたが頼もしいと思えた。

そして先に話した青水を思い出していた。

しかし、『私情を入れている場合ではない』と気持ちを入れ替え、更に付け加えた。

「でも、一緒に行くというのなら、きなこさんにはレベルアップを要求する事になる。そして凱歌、君はきなこさんよりも更にパワーアップしてもらわなければならない。

今の二人の力関係から言うと凱歌、君の方がきなこさんに負けている。もちろん、本人同士でやったわけではないが・・・。

君が寝ている間にきなこさんは、操られていた時の君よりも強くなっている。これは真実であり、俺もその成長ぶりには驚いている。

そして、何より俺は君達に俺達のような事になって欲しくない・・・。そのためにも君達には俺達が出来る限るの技術を叩き込む。厳しい事を言うがこのままでは二人とも犬死になりかねない。だから、俺達の猛特訓を受けてもらう事になる。死ぬほど厳しい特訓を・・・それでも行く気があるなら俺達は

出来る限りの協力をする。どうするお二人さん？」と龍牙は言った。

二人は顔見合わせ、覚悟を決めた。そして、二人は同時に「やります！」とはっきりと言った。

「よし！二人の覚悟は分かった。では、始めに凱歌に元気になってもらおうとしますか。

特訓はそれからだ。」と龍牙は言った。そして、龍牙は凱歌を連れて部屋を出ていた。

残されたメンバー達は特訓の内容を検討していた。その相談をきなこは遠くから聞いていた。

その相談の声が聞こえる中で、不安を覚えた。

龍牙はどうする気だ…。特訓って龍牙と天山がやっている奴だろう。二人に死より恐ろしい恐怖を経験させる気か？」と真剣に相談しているのである。

きなこは『一体どんな特訓をするの！？』と動揺してしまった。

それからは数分して、それぞれ部屋の中で好きな事を始めた。

きなこも蒼凱とパソコンでニュースを確認していた。

— 1 時間後 —

龍牙が凱歌を連れて帰ってきた。

その凱歌の姿に一同は違和感を感じてしまった。違和感を感じた格好とは、今まで黒ずくめの格好が基本だった凱歌がジーパンにオレンジのTシャツそして半袖の上着というカジュアルな格好だった。

きなこは、恥ずかしいそうにしている凱歌の姿に「凱歌の本当の姿」=「ホイ」を見たような感じがしてきた。

俺の服だがサイズは大丈夫だったな。俺もそんなに数多くは持っていないんでこんな感じになっちまったが、なかなかいいだろう？あのままじゃあ、「見つけてくれ」と言ってるようなもんだからな。」と龍牙は言い、凱歌の背中を押した。

押された凱歌は、全員の視線の前に出てしまい、恥ずかしさから赤面してしまった。

その恥ずかしがる姿に一同が笑い出してしまった。

凱歌はその態度に怒り出してしまった。

「どうして笑うんですか！？」と凱歌は言った。しかし、それでもみんな笑っていた。

悪かった、凱歌。でも、お前が黒以外を着ているイメージが無くてな。それにそこまで恥ずかしがる事は無いだろう？その反応が面白くてな。」と龍牙が言った。

しかし、その言葉一人違う反応を示す者が居た。それはプロフェッサーだった…。

おかしいのう。凱歌と同じ様な反応をしておった者が、昔居たような気がするんじゃが…。そやつがここに居ると思うんじゃが確か。」と名前を呼ぼうをした瞬間、

「それは俺だよ！」と名乗り出た。それは…龍牙だった。

確かにアンタに助けられて精神病が完治してから、ここに入ってきた時に初めて自分で服を決めた時にな！凱歌の恥ずかしがる気持ちは分かるが、他人から見るとこんなに面白いものとは思わなかった…。」と凱歌に頭を下げ、謝った。

凱歌はその低姿勢に「いいですよ。」と機嫌も直ってしまった。しかし、龍牙は凱歌に許しの言葉を受けた瞬間、プロフェッサーを鋭く睨み、言った。

「プロフェッサー！！お前、わざわざ言わなくてもいいだろうが！」と物凄い声で怒鳴った。

それに引かず、プロフェッサーは冷淡に言った。

「それはお前が自分の事を棚に上げるからじゃよ！」と。これには龍牙も言い訳は出来なかったが、

その意地悪い微笑みに「己の野郎！」と殴りかかった。

これに「わしとやり合うか！」とプロフェッサーが応じてしまった。

その瞬間、プロフェッサーを蒼凱が、龍冴を天山が押さえていた。プロフェッサーは後ろから押さえられていた。龍冴は天山の剣を首筋に当てられていた。

二人は静かに怒りを納めた。これにより二人を押さえていた蒼凱と天山が離れた。

この二人の喧嘩の真剣さに凱歌ときなこは固まってしまった。

「二人ともいい加減にしてください！大人気無い！お互いに怪我したいんですか？次、こんな事したら容赦しませんから！」と言い、天山は剣を鞘にしまった。

二人は「ふん」と背を向け合ってしまった。そんな二人に蒼凱と天山は呆れてしまった。

「全く！くだらない親子喧嘩に付き合ってるほど、暇な時間なんてないんですから！」と天山が言った。

これに二人は同時に、誰が親子だ！！」とキレた。先に龍冴が言った。

「こんな奴が父親な訳ねえ～だろうが！俺には親なんていねえ～んだよ！！」と龍冴は怒鳴った。

「わしもこんなガキが子供だったら、死んだ方がマシだ！」とプロフェッサーが言い返した。

「何！？それをお前の口から聞くとはな！お前が俺を造ったくせによ！！」と龍冴は言った。

凱歌ときなこの二人はこの龍冴の言葉に気になった。「俺を造ったくせによ」。

「造る？」二人は顔見合わせ、二人に言った。

「造った？どういう事ですか？」と凱歌ときなこは問い掛けた。

この問いに喧嘩していた二人は動揺し、「えっ。いやその・・・。」と言い、お互いに顔を見合わせ固まってしまった。そして、龍冴は慌てて言った。

「あれは・・・言葉の綾だよ、言葉の。」と言い訳にしか聞こえないような事を言った。

プロフェッサーは頭を抱え、何か考えていた。

凱歌ときなこはそれに問い詰めようとしたが、口を開いた瞬間、天山が口を挟んだ。

「今はその事は話せないんだ。その代わり、いつか必ず説明する。だから、今回はこの辺で許してくれ。」

それでいいな。龍冴、プロフェッサー。」と龍冴達を見て天山は言った。「ああ。」と二人が答えた。

凱歌ときなこは、渋々問い詰めるのをやめた。

～第21章～＜神様＞

少し間が空いた後、龍冴が言った。

「さてと。協力するとは言ったが、俺達には命令も許可も出て無い訳だから個人的にしか動けない。

しかも、指示が来ればそちらに行く事になる。

命令が来る前に始めないとな。」と言った瞬間、立てこもり事件発生の時鳴った警報とは異なる警報が鳴った。これに天山が言った。

「これまたタイミングがいいのか、悪いのか・・・。」あの二人」からの定期連絡が来ましたね。」と言い、ミッションルームの大画面の前に全員が急いで集まって来た。

蒼凱は急いでコンピュータを操作していた。

「これはな。俺達の、えっと上司に当たる方からの連絡時の合図だ。ここで報告や大まかな今後の活動を決めたり、指示を受ける。重要な連絡さ。お前達も見るといい。俺達の物凄い”低姿勢”をさ。」と龍冴は笑いながら言った。全員が画面の前に集まったのを確認してから、蒼凱が言った。

「じゃあ、繋がりますよ。」と。それに「いいぞ。」と龍冴が答えた。そして、四人が跪いた。

その後ろに凱歌ときなこが立っていた。

画面に二人の男が映った。その二人の胸には警視庁の階級章を煌いていた。

その二人の姿と階級章にきなこははっとした。きなこはつい あっ。」と小声だが言ってしまった。

凱歌は 知ってるの？」と小声で訊いた。

「うん。あの二人、”現場好きのキャリア”と評されるキャリアよ。確か、”運難コンビ”とか呼ばれてる。」

ときなこが説明した。

それに対して凱歌は「運難コンビ”?”」と聞き返した。

きなこは 確かね。”自らに幸運を。相手に困難を。”とかいう意味だったと思う・・・。」と答えた。

そんな中で、龍牙が挨拶した。

「どうも、お久しぶりでございます。今回は珍しくお二人でお出になるとは。驚きました。」といつになく言葉を選んで龍牙が話していた。

随分と他人行事に話すね・・・私達と君達の仲なのにそれはないと思うよ。それともお客が居るからか？」と色白の男性が聞いてきた。

「いえいえ。いつもの様に報告を致しているだけです。我々から見れば、貴方様お二人は神ですから。そして、我々は神に遣える使徒ですから。」と顔を上げ、微笑んで龍牙が答えた。

「これまた凄い事を言い出すね。でも、そろそろ前に出てきてくれるかな？警視庁国際二課在籍、円道寺きなこさん。そして、国際指名手配犯、王 凱歌。」と色白でないもう一人の男性が言った。

その声は二人の名前を呼ぶ時だけが妙に低く怖かった。二人は静かに四人の横に進んだ。

それにより画面に映る二人は凱歌ときなこを見て、強張った顔する二人に微笑んで言った。

「そんなに緊張する事はない。俺達は、君達を裁くつもりはないし、そんな力はないしね。俺達は君達の味方だ。では、自己紹介をしよう。俺は、南原 清鷹。コイツは、内村 輝良。先ほどきなこさんが言っていたが、俺達の階級は警視監で”運難コンビ”と呼ばれている。まあ、”現場好き”という所も合っている。良々難事件の時には勝手に現場に行っちゃうからね。ところで龍牙、二人には何処まで説明した？」と警視監の南原氏が言った。

それを黙って内村氏が見ていた。

「はい。二人へはきなこさんの措置が決まっていまらなかったが、組織については一通りの事は説明しました。ただ、私とプロフェッサーの事につきましては、まだ話しておりません。」と龍牙が頭を下げたまま言った。

「だから！いい加減、いつもの様に話せ！人をおちょくってんのか！」と内村氏が怒った。

「そうですね。いい加減、疲れてきたんで普通にしますか。まあ、みんな。」と龍牙が言うと、四人が首を回しながら立ち上がり、さっきとは打って変わって凱歌達に見せるいつもの態度になった。

この態度の変化に凱歌ときなこは驚いた。

「やっぱりそのくらい反抗的じゃないと、”四天王”じゃないな。じゃあ、そろそろ報告を聞こうかな。」と南原氏が言った。その後は蒼凱が作っていた報告書を見ながら、一人一人の報告を聞いていった。

～第22章～＜父が娘に隠していた秘密＞

－30分後－

立てこもりの報告がほぼ終わり、少し間が空いてから内村氏が静かに口を開いた。

「そう言えば・・・きなこさんの苗字、円道寺でしたよね・・・。まさかとは思うけど、”あの方”の娘さんとかではないよな～。」と呟いた。

それに対して南原氏が「あの方””って？まさか！”創立メンバー”のか！？」と言った。

そして、プロフェッサーが「可能性はあるのう。お二人とも直接聞いたらどうじゃ？」ときなこの方に振り向きながら言った。

私達がですか？そうですね。聞くに越した事はないか……。でも……。仕方がない……。

きなこさん、貴方のお父上は雁太郎なんて言いませんよね？」と「躊躇います様に』と祈る様に内村氏が言った。

きなこは驚きつつ「どうして父さんの名前を知ってるんですか！？」と言った。

これに運難コンビと四天王が頭を抱え、「やっぱり……。」「や、やばいな〜。」と言っていた。

その時だった…。

久し振りに来たが、随分と暗い雰囲気だな〜。」とミーティングルームの扉が開いた。

その場に居た者の視線がその一点に集まり、龍牙が素早く入って来た人の前に行き跪いた。

「この前は気付かず、すみませんでした！お久しゅうございます。雁太郎様。」

と龍牙は深々と頭を下げた。そして、龍牙の前にはきなこの父、雁太郎が立っていた。

きなこと凱歌は何が起きたか分からず立ち尽くしていた。

あの状況じゃ〜。仕方がないさ。その上、うちのきなことホイさんを助けてくれたんだ。お互い様だ。

おう！きなこ、ホイさん元気か！おお、博士。アンタも生きてたか。」と言った。

龍牙は雁太郎の言葉を許しの言葉と取ったらしく、立ち上がった。

雁太郎に呼ばれたきなこと凱歌は慌てて返事をした。しかし、状況を理解できていなかった。

博士と呼ばれたプロフェッサーは懐かしそうに雁太郎に近づいた。

わしはそう簡単には死なん。お前さんこそ、元気にしていたか？アンタの娘はアンタ以上に怖いぞ。」

とプロフェッサーは笑いながら話した。

「やっぱり……。しかし、お前んとこの龍牙だっけずいぶんと大人になったじゃねえか。」と雁太郎も答えた。二人が会話に花を咲かしている間に、運難コンビと残りの四天王がきなこと凱歌に説明をする事にした。

「じゃあ、説明しようか。この組織を立ち上げる時に関わった人間を“創立メンバー”と呼んでいます。彼らは裏世界で優れた能力や活躍していた者達です。人数は当初5人。そこから組織の5の部門が作られています。現在生きている方は、3人だけです。その内の一人はプロフェッサーです。そして、きなこさん、実は君の父上はこの組織の“創立メンバー”の一人なんです。

その証拠にここに入る事が出来ました。ここに入れるのは、登録されている者のみ。

ここに居る四天王とその部下の上位の者、私達二人、そして、“創立メンバー”だけ。何も聞かせていない様ですが、君の父上は天才スパイだったんです。」と内村氏が続けようとした時、雁太郎が話し出した。

「と言っても、随分と昔の事で、母さんと結婚する前の事だ。母さんと出会う前にそういった事から足を洗ったんだ。でも、今回のホイさんの事と龍牙の姿を見て、“ピーン”と来てな。久し振りに来たわけだ。」と雁太郎が言った。きなこは雁太郎の顔を見たまま固まっていた。

そして凱歌も状況が飲み込めず呆然としていた。

「かし、まさか貴方が“創立メンバー”のお方とは、。それで私の変身がばれた訳ですか。

挨拶が遅れました。初めまして、天山 秋と申します。この前は碧河 葵としてお会いしました。」

と天山が言った。

「おお〜。お前だったか。凄くうまかったよ。でも、ホイさんに直接合った事がないから、ちょっとの違いが出たな。でも、合った事がないのにあそこまで出来るとは……。凄かったよ。」

と雁太郎が言った。

凱歌は、この事で雁太郎に感じていた疑問が解けた。それはなぜ凱歌が一声うまぐ喋っただけで気付かれたのか、”暗箱”を知っていたのかという謎が解けたのである。

そして、きなこがこんなに強いのかも分かったような気がした。ここに入ってきた直後の雁太郎はいつもの雁太郎ではなく、凄腕スパイの様だったからである。そして、状況を理解してきた、きなこが言った。

『どういう事、父さん！？なんで隠してたの！言ってくれたら、ホイさんをもっと早く助けられたかもしれないのに！』と怒鳴った。これに雁太郎は頭を掻きながら言った。

『それはな～。この組織に関わっていたという事を知られなくなかったし、他にいい方法があると思ったんだ…。どちらにしても、ここにはもう来れないと思ってたのもあるんだがな。』と言い、椅子に腰掛けた。

～第23章～＜開かれた門 進む道＞

暫しの沈黙の後、運難コンビが順に言った。

今後についての指示が出ている。もちろん、きなこさんと凱歌についても出ている。心して聞いてくれ。』と言い、運難コンビは顔見合わせ頷いた。

そして、四天王ときなこ、凱歌そして雁太郎は緊張した。「これからについては大きく分けて6項目の指示が出ている。

- 1、これからの指示は、今後全てを差し置いて優先する事。
- 2、四天王全員にある組織の殲滅活動に従事してもらう。
その殲滅する組織は分かっていると思うが”1211”だ
これは凱歌がここに居る事とは関係なく国家間で決まった事らしく
どうも邪魔になってきたらしい。
- 3、この殲滅活動に王凱歌、並び警視庁国際二課在籍円道寺きなこ協力、共に活動を行なう事。そして、四天王は二人の命を守る事。
- 4、これは異例だが…。1211のボスの生死は問わない。
死亡時はその死体を持ち帰る事。
- 5、部下の使用は原則禁止。君達の仕事を代行してもらうためだ。
- 6、これは君達にとっては喜ぶ事だと思う。しかし完全決定ではないという事を肝に銘じて聞いて欲しい。龍牙、君に王凱歌並び円道寺きなこの処分を一任する。以上6項目だ。」

と南原氏が言った。

言い終えた瞬間、龍牙は「よっしゃ～！」と喜び飛び跳ねていた。周りの人間はその行動をただただ見ていた。そして、その視線に気付き言った。

「どうした？喜べよ。俺が二人の『処分』を決められると言う事は、凱歌を自由にだって出来るんだぞ！」と龍牙は喜びを全身で表現しながら全員に言った。雁太郎は大きく頷き「確かに。」と納得していた。きなこと凱歌はその言葉に「処分」とはこれからの行く末を指している事を理解し、きなこは「やったね！」と凱歌に抱き付いた。その光景に雁太郎は「やっぱり。」と確信を持った。しばらくして喜びが治まった時だった、段々指示の内容のおかしな所に気が付いて来た。まず、無意味な殺生をしない事を最大の掟としているこの組織に「1211のボスの死を望んでいる」ような指示が下だったのである。そして、全員がその事を考えている時「運難コンビ」が同時に口を開いた。

「実はもう一つ指示がある。」と同時に話し、二人はどちらが言うかで顔を見合わせてしまった。結局、南原氏が話す事になった。

「もう一つの指示は龍牙そしてプロフェッサー。君達にのみ出ている。それは特例措置『R』が発動された・・・。」と静かに言った。

これに二人は明らかに深刻そうな顔になっていった。きなこと凱歌は「特例措置」が何なのかを天山に訊いた。

「特例措置『R』は龍牙とプロフェッサーにのみ課せられた本当の意味での特例措置で発動されたのを見たのは初めてです。私達でも詳しい事は知らせてません。話によると『過去の清算措置』だそうですよ。それしか分からないんです。説明になりませんね。」と教えてくれた。沈黙が部屋を支配してしまった。

— 5分後 —

そんな沈黙を「運難コンビ」が破った。

「しかし、上は何を考えているかは知らないが、俺達二人は君達に無事に帰ってきて欲しい。いいか、何が何でも無事に帰って来い。無事に帰ってきたら、今後は俺達が直にそちらに行くよ。もう5、6年行ってないからな。いいだろう、みんな。」と本当に心の底から心配している声で言った。「さすがの『運難コンビ』も『R』には心配している様だが、な～に～！心配ない！俺達はこんな事で死ぬ訳にはいかないし、ボスにも死以外の罪の清算方法で償ってもらおう！」

この殲滅活動が終わり、凱歌に新しい人生が開いたらみんなで祝おうぜ！そうそう、明希も呼ぼう。凱歌の事、物凄く心配してたからな。」と龍牙はさっきとはまるで違う顔で言った。

「よし、分かった。楽しみに待っているぞ。また何かあったら連絡する。それでは。」と「運難コンビ」の連絡は切れた。その切れた後の一瞬、龍牙の顔に影が現れた様に凱歌には見てた。

「しかし、上も何考えてるんだか・・・。この命令じゃあ、『1211のボスを殺せ』って言ってるようなもんじゃないか！俺達は殺し屋じゃないんだぞ！全く許せん。」

と龍牙が怒りを込めて言った。それに他の3人も頷いていた。

「まあ！これで俺達は公式に二人の手伝いが出来る訳だ！それは良かった良かった。でも、こっちも仕事という事になるがな・・・。」と龍牙は頭を掻きながら言った。

そして、4人が静かに二人の方を向き、「これからよろしくな。」と全員に挨拶をして、龍牙は手を差し出した。

二人は「こちらこそ。」と挨拶をして龍牙と順に握手をした。少ししてから、雁太郎が言った。

「これで協力体制は出来たが。ホイさんは操られている時の事は覚えているのか？」とホイに聞いた。凱歌は必死に考えていた。少しして「よく覚えていませんが、何となくなら・・・。」と答えた。

「やっぱり、凱歌に基地の場所を聞くのは無理か。そうだ！凱歌、女の子の事を覚えているか？」

治療してもらった家に居た子供だ。」と龍牙は聞いた。

女の子？ん〜。あっ！もしかしてあの女の子かな？」と答えた。

龍牙は慌てて写真を取り出した。いつ取ったのかそこには楽しそうに笑う明希と四天王の四人が居た。

凱歌はその写真を見て、「この子。分かります。」と明希を指差した。

良かった！覚えてなかったら明希ちゃんに怒られる所だったよ。しかし、記憶喪失の時の記憶は何かあるようだな。じゃあ、きなこさんのお母さんの美智さんを助けたのは覚えてるな。」と龍牙は聞くと、凱歌は「はい。無意識の内に身体が動いて、その内全部思い出したのは分かります。そこで范に逢いました。」と答えた。

「そうか。」と龍牙は頷いて考えを巡らしていた。

チップを付けられる時の記憶は無いのか？」とプロフェッサーが聞いた。

「えっと、明希ちゃんでしたっけ。その子に逢う前にプロフェッサーよりも少し年配の男に首筋だと思うのですが、何かを注射をされ、激痛の中、それでも逃げたんですが、その時、海に落ちてその後は女の子の家に。でも、范に逢った時に戦おうとしたら突然煙が出てきて、それを吸ったら力が抜けてそのまま・・・。その後の事はよく覚えてません。」と静かに答えた。

「ホイさん。」と静かにきなこが心配そうに言った。

「じゃあ、狙撃の事も家族を襲ったのも覚えてないのか・・・。」と龍牙は考え事をしながら独り言を言った。

「えっ！僕は何をしたんですか！」と凱歌は龍牙の二の腕を掴み言った。

龍牙は『しまった。余計な事を言った。』という顔した。

「いや、対した事じゃない。第一お前の意志じゃなかった。

知らない方がいい事もある。」と龍牙は誤魔化そうとした。しかし、凱歌は、なおも聞いてきた。

プロフェッサーが「そこまで言うんだ。教えてやれ。」と言った。

「でも、それは、。ショックが大き過ぎないか？」と龍牙が反論したが、もう失声症になった。

そして完治した。だから身体は全てを知っているという事だ。だから大丈夫じゃよ。」とプロフェッサーは言った。

それに対して「分かった。しかし凱歌、心して聞いてくれよ。もう治療は勘弁だぜ。」と龍牙は言った。凱歌は頷き、手を離した。

～第24章～＜強き決意＞

龍牙は静かに凱歌がチップを付けられたからの事を丁寧に、そして慎重に言葉を選んで説明した。

— 30分後—

ここまでで3人を狙撃した事の説明を終えた。そして、問題である母市江への狙撃と円道寺家のみんなの対決、そしてきなことの死闘を説明した。もちろん、操られていた事、ためらいがあった事など付け加えていた。凱歌は静かにその説明を聞いていた。きなこと雁太郎も説明に加わっていた。全ての説明が終わった時、凱歌は自分のした事に、理解が追いつかず実感が無い感じだった。ただ、手の平を見ていた。その見えない血に染まったその手を・・・。

「お前、大丈夫か！？意志が無く、ましてや操られていたんだから、責任を感じる必要は無いし、もし感じているのなら、なおさら、この殲滅行動を成功される必要がある。これ以上、お前のような奴を作らない為にもな！」と龍牙が凱歌の肩を叩いて言った。沈黙が部屋を包もうとした時だった、凱歌が口を開いた。

僕は今、龍牙さん達に説明された事をほとんど覚えてません。

でも、母さんやみんなとの事は何となくですが覚えています…。僕は人を人と思わない1211を、僕のような人を、これ以上増やさないためにも戦います。」と今までに無い強いしっかりとした信念を秘めた声で凱歌は宣言した。

「よし！よく言った。これで前に進める。」と龍牙は言った。

ホイさん、頑張ろう！」ときなこが言った。

～第25章～＜二人の関係＞

龍牙達四天王と凱歌、きなこそして雁太郎は、今後について話していた。計画の期限については、運難コンビは触れなかった事から、長期的なものになると上層部も考えているらしい。

そのため準備に時間を掛ける事が出来る。しかし、凱歌ときなこは『早々に倒したい』と言ってきた。

これに大規模組織の壊滅経験が多い龍牙と天山は

規模の大きい組織ほど奥に何があるか分からないし、ましてや、あんなチップを使ってくるような組織だ。何が出てきても不思議は無い。」と交互に言い、天山は龍牙を不思議な眼差しで見た。

龍牙は自分を指差し『俺？まあ確かなな〜。』と言った。

このやり取りに凱歌ときなこは『龍牙って何者なの？』と疑問が再び出てきてしまった。

それを知ってか知らずか龍牙は話し続けた。

『そういえば八雲が話題になったな〜。今アイツ何処に居るんだろう？蒼凱、調べてくれるか？』

と龍牙は言った。

『そう言われると思ひまして調べておきました。今も骨董品店をしてますよ。つい最近移転した様ですがね。』と地図を渡した。

確かに凱歌ときなこが行った時の場所から変わっていた。それを見て龍牙はあっさりと言った。

『さすが蒼凱。しかしな〜。どうしたものかな…。久しぶりに会いに行くとするか。あの『豚ちゃん』に…。

二人も行く？』と凱歌達に聞いてきた。

二人は『行きます。』とはっきりと言った。

しかし『八雲を『豚ちゃん』と呼ぶとは…。』と内心二人は驚いていた。

ただ、きなこは『確かに』と少し納得していた。

そんな中で、天山が口を開いた。『私も今回は行きます。』と。これに龍牙が驚いた。

『えっ！お前が。』と。

これには天山も機嫌を損ねたらしく顔をしかめた。

悪かった。悪かった。お前が俺としかも自ら言うとは思わなくてさ…。』と龍牙は弁解した。

私だってここから出たい時だってあります。第一、いつ私が貴方と出かけたくなかったと言いましたか？』と

天山は言った。龍牙は『確かに…。』と思った。

『じゃあ、天山は変身して来ないとダメだな。』と龍牙は言った。

『そうですね。この仮面のままではマズイですからね…。ちょっと行ってきます。あ、そうだ。きなこさんも服を新しく選んでください。そのままではマズイですからね。沢山ありますからどうぞ。』

と天山はきなこを奥へ連れていった。

凱歌と龍牙は二人の背を見ながら、『どんな格好になるかな？』と考えていた。二人が戻ってくるまでどうやって行くかを決めていた。凱歌が何を運転出来るのか知らなかったので龍牙は聞いた。

凱歌。お前は何か免許とかなんか持ってんのか？』と単刀直入に質問した。

僕ですか？一応大型バイクの免許、ヘリの免許も持ってます。車の免許も持ってます。』

と淡々と言った。

その感じに龍牙は『そんなのんきに言える資格じゃないぞ。色々と忙しい最中によくもまあこんなに取れたな～。とんでもない奴かも・・・』と考えてしまった。

『そう言えば龍牙さんはどんな資格を持ってるんですか?』と今度は凱歌が質問した。それに雁太郎も聞きたいね～。』と言って近づいてきた。

『いやそんなに近づかないで下さい。あと凱歌、俺の事は担当医だろうとなかろうと龍牙と呼び捨てでいいぞ。年下の俺もお前の事呼び捨てにしてるんだからな。』と言った。

凱歌は『僕より下なんですか!?でも出来ませんよ・・・』と答えた。

『まあその内慣れるか・・・免許はまず、医師免許、歯科免許、理学、作業、言語、心理療法士免許等の医学系免許全般に、乗り物系では大型バイク、トラック等の特殊車種の免許全般、ヘリ、飛行機、船舶の免許、もちろん自動車も国際A級ライセンスだし、他にもコンピュータ系の資格など色々と資格、免許を持っている。』と淡々と龍牙が答えた。

その免許、資格の多さと『まだ足りない』というような口調に凱歌は固まってしまった。

これに龍牙は『そんなにビックリするなよ。お前よりも色々と複雑な人生を送ってるからな。』

と話を続けた。

『しかし、凱歌は随分と免許を持っているから、今回は凱歌の運転テクを見るのを兼ねて車で行きますか。でも、聞く話によるときなさんの運転は凄いらしいぞ・・・』と噂をすれば影で、着替えを終えたきなこと、美しい黒髪の女性がやってきた。

凱歌は、着替えたきなこの美しさに見惚れていた。そのきなこの服装はTシャツの袖を肘の上まで折り、ズボンは黒のシックなズボンだった。しかし、そのきちっとした格好がきなこの美しさを輝かしていた。

そして、龍牙はきなこの後に現れた、黒髪の女性を見て動揺し固まっていた。

凱歌ときなこはその光景を不思議に見ていた。なぜなら、龍牙は見てはいけないものを見ているような顔していたのである。そして、黒髪の女性が口を開いた。

『禍悪蘇、逢いたかった・・・そんな顔をしないでよ。私に逢いたくなかったの!?』

としっかりとした声で言った。それに対して龍牙は俯き、呆れた顔を上げ言った。

『お前・・・!俺を馬鹿にするのはいいが、青水・・・きなこを馬鹿にする気か!貴様～!』と

龍牙は怒鳴った。それに対して、黒髪の女性=青水きなこは見下すような冷たい目をして言った。

『私にそんな口をきいていいと思ってんの!禍悪蘇!貴方のせいでどれだけ。』

と続けようとした時、龍牙が大声で言った。

『やめろ～!分かったから。その声でその眼差し、その雰囲気であんなに話し掛けなくてくれ!』と頭を抱え、しゃがみ込んでしまった。

その光景に凱歌ときなこは驚いてしまった。

『二人とも驚いた様じゃのう。あの何でも出来る龍牙の唯一の天敵と言ってもいいもの・・・それが青水きなこじゃ。天敵であると同時に唯一愛した者じゃ。だから、天山が青水に化けると、龍牙は頭が上がりなくなるんじゃ。相当、青水に、のされたからのう・・・』と二人にプロフェッサーが説明をした。

凱歌ときなこは説明と目の前で行なわれている光景から、龍牙と青水の上下関係が見えてきた。

そして、凱歌はきなこの強さが、いつか自分を龍牙の様にしてしまうのではと、考えてしまった。

『さあ早く立って!これからの事を凱歌さんと決めてたんでしょ!私達に説明して!』と青水は龍牙に命じた。それに龍牙は『はい。』と反射的に言って立ちあがった。

『一応凱歌の運転テクを試すのを兼ねて、車で行こうと思ってる。』と言った。

この意見に全員が了承し、凱歌の運転で行く事になった。

～第26章～＜用意された”二人の時間”＞

龍牙に先導され外に出てきた4人。天山と龍牙はとても嬉しそうだった。

ああ～！久しぶりの外だ～！しかも業務以外で出られる～！」と龍牙は大喜びだった。

ええ、確かに禍悪蘇は命令以外で、外は凄く久しぶりだったわね。」と青水の話し方で話した。

その時、龍牙は”トキ”としていた。そして、呼び方を”龍牙”にする様に言った。

しかし、青水は「はいはい。」と聞いていない感じで歩いていった。

これに龍牙は「ああ～。」と溜息を吐いて、とぼとぼ車に向かって歩いていった。

その背中を見ていた凱歌ときなこは、おかしくてお腹を抱えていた。

そんなやり取りがありながら車に着いた。

凱歌は急に緊張してきたのか顔が引きつっていた。その顔に運転を任せる3人は不安を覚えた。

そして、凱歌が緊張した声で言った。

あのう・・。実は僕、免許を取ってから全く運転してないんです。」ととんでもない事を言い出した凱歌に全員が「ええ～！！」と絶叫してしまった。

しかし、龍牙は聞いた瞬間こそ驚いたが、冷静に凱歌に聞いた。

「どれくらい運転してないんだ？」とこれに凱歌は「4年ぐらいは運転してません。」と答えた。

「じゃあ、運転出来るな。俺が助手席に座るから運転しろ。分かったな。」

と凱歌に自信ありげな声で龍牙は言った。この声に凱歌は龍牙を信頼する事にした。しかし、それを聞いていたきなこと青水は固まってしまった。二人は顔を見合わせ「大丈夫かな？」という顔をした。

そして、4年ぶりに運転する運転手の車が発車した。

－10分後－

凱歌の運転はとても4年ぶりの運転とは思えない運転だった。きなこは4年ぶりで、しかも龍牙に色々聞きながら運転しているホイの方が運転がうまい事に焦りを感じていた。

しかし、そんな焦りをよそに龍牙は気が気ではなかった。

凱歌は確かに運転の才能があった。しかし、新しい車の機能を理解していないので説明をしなければならなかったし、日本での運転は初めてである為、交通ルールの違いが分からないのである。

龍牙は「俺、着く前に気の使い過ぎで倒れるぞ……。帰りは俺が運転しよう。施設に着いたらまず交通ルールを説明しないと……。やる事が多いな～。』などと考えつつ凱歌に説明をし続けていた。

－15分後－

凱歌の安全運転で八雲の店の前に到着した。

龍牙は「俺とえっと・・。青水の二人で先に入るから、少ししたら来てくれ。行くぞ。」と言い、

青水を呼んだ。青水は「そんな言い方は無いでしょ！」

と怒りながら車を出た。これに龍牙は「本物みたいな事言うな！」と怒鳴り、青水は舌を出し、

「へえ～んだ！」と言い、「プイ」と横を向いた。

”やれやれ”という感じで龍牙はふてくされた青水をテクテク追い掛けていた。

こんなやり取りを見ながら、凱歌ときなこは車の中で二人きりになってしまった事に気が付いた。

凱歌は『どうしたものか』と外に目をやろうとした時だった。きなこが助手席に乗って来た。

二人は気まずそうに外を見ていた。それから沈黙が車内を包み、ますます話しづらくなってしまった。そんな時だった突然、音が凍りついた空気を砕いた。

「ホイさん、運転うまいね。私なんかより全然うまいよ。」ときなこが話しかけた。

「そうかな？龍冴さんの補助のお陰だよ。でも、きなこさんも運転するの？」と凱歌が言った。

「うん。運転するよ。でも、はなの方がうまいの。そう言えばずっと聞きたかったんだけど・・・。ホイさんと初めて戦う前の夜に言ったあの言葉の意味って何だったの？今聞くのも何だけど、。。。」ときなこがためらい気味に言った。

「えっ？あれは・・・。」と凱歌はあの時を思い出し、顔を赤くし外を向いてしまった。

きなこは外を向いてしまった凱歌に、 教えてよ。」と腕を掴んだ。

凱歌はその見たことの無い色気のあるきなこに驚いてきなこを見た。そして二人の視線が重なった。

暫しの沈黙の後、凱歌がボソッと行った。

「僕は君を本当に忘れない。」と言い、静かに口付けをした。

きなこもそれに静かに応じた。

そのやり取りを遠く壁に寄り掛かりながら見ている奴らが居た。龍冴と青水だった。

龍冴はその美しい白銀の髪を掻き上げながら横目で見ていた。その口元を緩んでいた。それを『全く』と言った感じで青水が見ていた。青水は龍冴の二十代前半の様に見える年齢とかけ離れた幼い顔を見つつ言った。

「そんな顔してないでよ！こうなる事を想定してあの状況を作ったんでしょ！いい加減盗み見なんて子供っぽい事、やめなさい！大体この距離でよく見えるわね！二人にも悪いでしょ。全く・・・。」と言った。それに悪戯が成功して喜ぶ悪ガキの様な顔していた龍冴は言った。

「そうだな。それに俺はよく見えるよ。出来が違うからな・・・。でも、久しぶりというかあの二人は、二人きりになかなかないから、もう少し二人きりさせてやりたいがな～。仕方がない・・・。」と言い、インカムを取り出し呼び掛け始めた。

ー車内ー

音の無い空間で二人は熱いぐちづけを交わしていた。そんな中、無音を切り裂く波が現れた。

「お二人さん、まだかい？悪いがそろそろ仕事に懸からないとまずいんだが・・。」

と気まずそうな声が後ろの方から聞こえてきた。二人は慌てて離れ、声がした後ろの方を見た。

そこには青水が座っていた所にインカムが置いてあった。そこから声がしたのであった。

「もし聞こえていたらインカムを取って返事をして欲しいんだが・・・。」と声が聞こえた。

きなこは慌ててインカムを取り第一声から怒鳴っていた。

「龍冴さん！私達の事ずっと見てたんですか！！」と。

龍冴は予想はしていたが、突然のきなこの怒鳴り声に驚いてしまった。

「わぁ！きなこさん！？ずっとは見えてませんよ。ちょっと遅いので見てみたら、いいムードだったので、たまにはいいかなと思って待ってたんですが、さすがに時間的にやばくなってきたので声を掛けさせて頂きました。準備が出来ましたらこちらに来てください。それじゃあ。」と龍冴は言い連絡を切った。

「あっ！切れた。もう～！」ときなこが言った。

「龍冴さん何だって？」と凱歌が聞いた。

「えっ？ああ、準備出来たら来てだって。しかも私達の事、ずっと見てたみたい・・・。」

ときなこは顔を真っ赤にして言った。

「ええ〜！？でも、どうして分かるの？」と凱歌が動揺しながら言った。

「声で分かるわよ。これでも刑事だからね。」ときなこは言った。

「やっぱり、全部見てたの分かっちゃったかな〜？」と龍牙は青水に聞いた。

「分かったわよ。きなことだって刑事ですからね。きっと二人に怒られるわね。」と嬉しそうに答えた。

「そんなに嬉しそうに言わなくてもいいだろう。」

と龍牙は顔を顰めながら低い声で言った。

二人がきなこと達が来た時の事を話していると、きなこが凱歌より前を進み、正に「怒っている」というオーラを放ちながら二人の前にやって来た。

『これはまずいぞ・・・』と龍牙が青水を見た。「だから言ったのに！」と青水は目配りを龍牙にした。

「やあ。意外と早かったね・・・。」と龍牙が話しを続けようとしたが、

「私達の事、ずっと見てたでしょ！どうしてそんなことするんですか！」ときなこは怒鳴った。

凱歌は見られた事が恥ずかしいのか黙って下の向いていた。

「えっ！いや・・・。たまには二人きりで楽しんで欲しいと思ったんだけど、本当に出てこないんで気まずくって沈黙してたら普通に呼びに行くつもりだっただよ。そしたら・・・。」と言うわけで。」

と龍牙は言い訳をしたが・・・。

「御託を並べるけど、はっきり言えば羨ましかったんだよね。愛する人がすぐそばに居る二人がね。」

と青水が淡々と言った。

「はあ〜。そんなんじゃあねえ〜！俺はただ・・・。」と龍牙は言うと、青水が「本当に」という視線を向けられ、確かにそうかもしれない・・・。俺は君達二人を羨ましいと思っているのかもしれないな。」と笑って言った。

その時、龍牙の前に青水が顔出し、突然口づけをした。龍牙は突然の事に動揺し、固まっていた。

「たまには私を本当の青水さんだと思ってくれても良い？」と青水＝天山が言った。

「うっ！お前な〜！いくら何でもそれは無理だ！」と口を拭いながら龍牙が言った。

そして少し間を置き、龍牙の動揺が収まってから、済まなかった。大人気無かった。でも、二人きりを楽しんで欲しかったのは本心だった。」と深く頭を下げた。きなこと凱歌は顔見合わせると笑い出した。

「じめんなさい。そんなつもりは無かったんですよ。本当に真面目ですね。龍牙さんは。でも二人の口づけには驚いた。」と凱歌は言った。「えっ？俺だって驚いたよ・・・。」と龍牙は言い笑った。

「それじゃあ気を取り直して行きましょうか。1 2 1 1の武器調達人の所に。」と全員が歩き出した・・・。

ー続く